

紺屋（こうや）の娘

大正末期の恋

ほりひとみ

紺屋〔こうや〕の娘

或る日、大きな家を探しながら田川沿いを歩いていた政治郎の耳に 助けてえーという娘の悲鳴が飛び込んできた。

アレッと思いながらその辺を見回すと、川の中ほどに若い娘が助けを求めている。政治郎は急ぎ上着を脱いで放り投げ、靴を脱ぐと川の中に飛び込んで行った。初夏とは言え、未だ川の水は冷たかった。

泳ぎには自信があったがそれほど深い所ではなく、娘を片手に抱きかかえるとすぐ岸に泳ぎ着いた。

川岸の染物屋の娘で遊び半分に川の水で自分で染めた布きれを水洗いしているうちに、それを流されてしまい、水の中に追いながら進むうちに泳ぎの出来ない娘は溺れる、と悲鳴を上げたのだった。

幼さの残る若い娘だった。

びしょ濡れだった二人は娘の家が川岸にあると

の事でそのまま家に向ったが、家は思いの他に豪壮な邸宅で政治郎は家中の人達から大歓迎を受け、命の恩人と下へも置かぬほど感謝された。

政治郎にしてみればそれほどの難しい事では無かったが、考えてみれば泳ぎの出来ない若い娘が衣服を纏ったまま川でもがけば溺れる事もありうるのだと、確かに泳ぎに自信のある自分が人気〔ひとけ〕の無い川っ淵を通りかかった事は運が良かったのだと思った。

大きな染物屋で代々この川岸で川の水を利用して染物屋をやっているとの事、娘はその家の末娘でよし子といった。

そのうち染物屋は政治郎からラジオを買い、周辺のお客を獲得する為、良く宣伝し、自ら案内してくれた。

よほど娘を助けてくれた事を感謝しているのだろう。

何川家の居間には良く政治郎の姿が現れるようになった。

それと同時によし子と政治郎の仲も急接近していった。

親も喜んでそれを見ていた。

東京から宇都宮に流れ着いて国鉄駅前以小間物屋をやっていた時、政治郎がいるかどうかを覗いて買いに来る芸者衆が多かったという事だが、母親譲りの美男子で、その上あたりは柔らかく誰にでも好かれた。中学で硬派の連中に殴られたのもそのせいかも知れない。

中学で助けてくれた資産家の二人の友達も眉目秀でたる若者だった。

そしてその頃は一度だって東京に行った事など無い人ばかりの時代で破産したとはいえ、由緒ある家庭に生れ、東京育ちでハイカラな政治郎は人に好かれこそすれ、嫌われる事など無かった。

損をしたのは中学時代、殴られたこと位だがそれすら縁になって逆に助けてくれる最高の友達を得ている。

いくらか経たぬうち、二人は世帯を持つ話にまで行き、喜んだよし子の親の計らいで家屋敷は先方が用意した所で生活を始めるようになった。縁は飛んでもないところに始まり、飛んでもないところで終わる。二人のままごとのような生活がやっとなれてきた頃、よし子は身ごもった。よし子の親は一人娘の懐妊を殊のほか喜び、何かと世話をやきに来るようになり、出産より幾らか早いかと娘を親元へ引き取った。今度は政治郎がよし子のもとへ通うようになった。

或る日、地方へ商売に行った政治郎が日暮れてよし子のもとへ戻った時、慌ただしい雰囲気に足早に駆け込むと母親が駆け寄ってきて政治郎によし子が危ないというのだ。

当時、妊娠や出産で命を落とすことは珍しい事では無かった。

一本の歯で死ぬ事も稀でない時代だった。

何日かの必死の看病も空しく、よし子はおなかの子と共にみまかった。妊娠中毒だった。一年に満たない生活だった。

あの時、俺が川のあたりを通らなかつたら . . . . .

いや、通らなかつたら溺れていたかもしれない . . . . .

どちらをとってもよし子は死ぬ運命だったのかもしれない . . . . .

政治郎の心の中によし子の事は消える事無く残った。

了